
魔女の見習い

アリス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔女の見習い

【Zマーク】

N8020Y

【作者名】

アリス

【あらすじ】

13歳のキャサリン・ストリートは、魔女の見習いをする「J」となる。

プロローグ

「みたまえ」

低く、堂々とした少女の声が聞こえる。

「まだ未成年だ。おそらく13歳だろう。魔女にとってはラッキーな数字」

「しかし……」

ここはどこ？あたしは戸惑いながらまだ目を開けられずにいた。

「わたしはそんなに残酷ではないのだよ、アーテルバーート」

「……どうなさるおつもりなのですか？」

「それはわたしがこれから決めることだ」

「……わかりました」

「それでいい」

「ゴツッゴツッと軽い足どり、しかしうつくりとした感じであたしの近くに誰かがきた。たぶん、さつきの少女だろう。」

「さあ、目はもう覚めているだろ？」「うう」

少女が指をパチンと鳴らすと、突然あたしの身体が宙に浮いた。

「きやつ」

びっくりして声ができる。はじめてその少女の顔を見る。

「お前の名は？」

まだショック状態でとても質問には答えられそうになかった。少女もそれに気づいたのか、ゆっくりとあたしを地面に降ろした。腕組みをし、指でトントンと腕をたたいてあたしの返事を待つている。

「キヤ……キヤサリン。キヤサリン……ストリートです」

自分の普段の声とは程遠い、変な声がでた。でも少女はすこし満足したような……感心したような顔をした。そのおかげで少しだけショック状態から解放される。

「キヤサリン。君は両親はいるかね」

これがあたしとのひと……のうちに魔女だと確信するひとの出で一
だつた。

1 傷ついた少女

父親は家をでていったきり帰ってこない。母親は、まだ12歳の一人娘につらくあたるばかりだった。

「いいかげん泣くのはやめな！さあはやく洗濯ツ！掃除だって皿洗いだつてまだじゃないか！」

それが母親が、父親がでていった次の日に言つた言葉だ。慰めもないで、自分は酒ばかり飲み、娘が仕事をさぼらないように見張つているだけだった。

この12歳の娘……名前はキヤサリンというのだが、心優しく、近所のひとにも人気があった。そこそこかわいらしかつたし、体も丈夫で、風邪をひくことはめつたになかった。

父親がでていったことがよほどショックだつたのか、母親の娘に対する態度は、どんどん悪くなつていき、ついには暴力までふるうようになった。料理をはやくださないからと殴り、自分が転んだのは娘のせいだと蹴つた。キヤサリンは毎日耐え、笑うこともなくなつて、泣くこともなくなつた。近所のひとたちはそんなかわいそうな様子をすぐに察し、母親を説得しようとしたり、それがダメなら少しでも12歳の少女の役に立とうと、慰めとなるうと、優しく話しかけてあげたり、最近あつたおもしろい出来事を教えたり、あるものは喜ばそうと思いついて笑いもやつた。しかし、キヤサリンは愛想笑いをするだけで、心の底から笑顔になることはない。その様子はとても弱弱しく、ぼろぼろだつた。とうとう誰かがキヤサリンを母親のかわりに育てようという話もでたが、それをとめたのはキヤサリン自身だった。母親はショックがおさまらないだけだから、しうがない。自分までいなくなつたら、さらに悲しむだろうというのが少女の意見だつた。みんなは渋々頷き、少女は毎日を頑張つて耐えた。

「もう薪が全くないじゃないか。もうすぐ冬が来るっていうの。」

びうしててくれるんだい。はやく薪をとつてきておくれ……」

あるとても寒い日の朝に母親にそいつわれ、キヤサリンはまひまひでつんつんの「マー」を着た。

「やういえばお前、」

呼び止められ、振り返る。田には恐怖がうつっている。「なあに、お母さん」

「最近近所のひとたちに迷惑かけてるつていうじやないか。これ以上迷惑はかけるな。話しかけたりするんじやないよ。迷惑なんだからね。森について、わざと薪をとつておいで！」

「でもお母さん、薪はウイリアムさんとのうれで買えるわ」

「迷惑だといつてんだろ！ はやくいきな……」

なにかを売ることで商売をしているんだから、迷惑にはならないんじゃないかと思つたが、逆らえばまたぶたれる。薪を買うお金だってないんだ。もしかしたら親切なひとが少し分けてくれるかもしれないけれど、それがばれたらまたぶたれる。

隙間風がはいつてくる家をでて、森につづく道を歩いた。薪といつても、斧を買つことも母親に許されないのでから、太めの小枝をさがすしかない。落ち葉だらけの道。それは赤や黄色などのきれいな色ではなく、茶色の、ぱりぱりとした道だった。

森に入る前に、一度だけ家の方向を見る。それからまた森のなかへと進む。暗く、心細い。でも、母親がいないだけいい場所に思える。さあ拾い始めようとしたところで遠くに、屋敷のよつた建物がたつていることに気づいた。

「変だわ。ここに屋敷なんてあつたかし！」

突然現れたようだつた。ゆっくりと近づいていく。ダメだ、はやく枝をひろつて家に帰らないと、怒られる頭のすみで警告のサイレンが鳴り響く。だけど、それ以上に好奇心のほうが強かつた。泣くことも笑うこともなくなつた少女にとって、めずらしいことだ。かさかさこう落ち葉の上を歩きながら、その屋敷をみつめる。木の枝が目にはいらぬように手で守りながら、歩いていった。どうと

う手が屋敷の壁につくと、好奇心が消えて今度は不安という感情でいっぱいになる。なかには、誰かが住んでいるのかしら。ふとそんな考えがよぎる。もちろん住んでいるはず。だって、つっここの間まではなかつたもの……。引き込まれるよつてドアへ近づく。扉にさわり、一瞬迷い……ノックした。軽く、一回。

ギギギギギギギギ……。大きな、少女の背丈の一倍はある扉がゆっくりと開いた。息をのみ、その場にかたまる。

……五分もそうしていただろうか。ため息をつく。それでもなにも起きない、誰も来ないので、一步、また一步と屋敷の中へ進んだ。と、後ろでバタンと扉が閉まる音がし、驚いて後ろを振り返った。しかし、もう扉は完全にしまっていて、いくらひつぱつてもおしても外には出られなかつた。恐怖を焦りが頭の中でぐるぐるする。さつき、中にはいるのはやめておけばよかつたのに……。

「誰だッ」

若い男の声……自分よりも2・3歳年上の少年が姿を現した。しかも、突然。どこから現れたかもわからない。

「きやつ」

次の瞬間、首の後ろがひやつとしたかと思つと、力がぬけて倒れていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8020y/>

魔女の見習い

2011年11月24日20時53分発行